



Title	非融合アクセントの具体的な形について：分離文節と接合文節の比較を通して
Author(s)	陳, 曦
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 37-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77064
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

非融合アクセントの具体的な形について

—分離文節と接合文節の比較を通して—¹

陳 曦

要旨 本稿では、非融合アクセントの具体的な形を検討するために、分離文節と接合文節の比較を行った。まず、『新明解日本語アクセント辞典』のCD音声で、分離文節と接合文節の発音の特徴を確認した。そして、接合文節の発音は郡(2017)が「文内イントネーション」を論じた際の、文の1つ1つの文節に生じる「アクセントを弱める」に相当し、分離文節の発音は「アクセントを弱めない」に相当するという考え方を提示したうえで、複合語全体が1つの中高型アクセントになるか否かという観点から、「分離文節」と「接合文節」を「非融合アクセント」の2種類のバリエーションとして扱った。また、「分離文節」と「接合文節」は聴覚的自然度に差があるのか、つまり、非融合アクセントの発音について、後部要素のアクセントを弱めることが聴覚的自然度に影響しているのかを聴取調査で調べた。その結果、文における非融合アクセントの発音において、アクセントを「弱めない」発音より、「弱める」発音のほうが、聴覚的自然度が高いことが示唆された。

1 はじめに

日本語の複合名詞には、[チュ¹ーゴクミ²ヤゲ]²（中国土産）[ジ¹コボ¹ーエー]（自己防衛）のようにアクセントが中高型の1単位に融合する（以下、融合アクセント）ものと、[チュ¹ーゴク¹ナンプ]（中国南部）[オ¹ーザボ¹ーエー]（王座防衛）のようにアクセントとして融合しない（以下、非融合アクセント）ものがある。

非融合アクセントは「全体としてひとつのアクセントに融合せず、前部も後部もアクセントの弁別的な特徴を失わない形で連結するタイプのもの」であるが、発音としては後述のようにバリエーションがある（郡2016）。

本稿では、非融合アクセントの具体的な形を検討するために「分離文節」と「接合文節」を比較しながら見ていく。まず、『新明解日本語アクセント辞典』（秋永(2010)）のCD音声で、編集者である秋永氏のいう「分離文節」と「接合文節」の発音の特徴を確認する。そのうえで、「分離文節」と「接合文節」には実際、聴覚的自然度に差があるのか、つまり、非融合アクセントの発音において、後部要素のアクセントを弱めるか否かが聴覚的自然度に影響しているのかを聴取調査で調べ、その結果を述べる。

1) 本稿は陳(2019)を元に新たにデータと分析を付け加えたものである。

2) 角括弧内の表音カナに付けられている記号“¹”は上昇、“²”は下降をあらわす。

2 秋永氏による「分離文節」と「接合文節」

『新明解日本語アクセント辞典』には、語の後にアクセント習得法則の番号が付いている。アクセントの融合・非融合問題と最も密接な関係にあるのは次の習得法則 97, 98, 99 だと思われる。その解説を以下に掲げる。

- 97 分離文節 二つ以上の文節を続けて用いられる場合、一つ一つの意味をはっきり表わすように発音すれば、各の文節が分離してそのアクセントどおりに発音される。
- 98 接合文節 日常の会話では、一つ一つの文節をきり離して発音するよりも、軽く続けて一語のように発音する場合が多い。このように文節が接合される場合には、前部の文節はアクセントどおり発音されるが、後部の文節は特に強調しようとしめない限り、次のように型の変化をおこす場合が多い。
(表 1 を参照)
- 99 結合文節 まれに慣用句などで、二つ以上の文節が続いて固定した意味を表わすようなものには、いつもひと続きに発音する傾向がある。この場合は、後部の文節が平板式ならば後部の第一拍まで高く、後部の文節が起伏式ならば、後部の文節のアクセントの高さの切れめまで高くなる。特に前部が平板式のものは結合文節となりやすく、全体が中高型になるものが多い。

複合語全体が 1 つの中高型アクセントになるか否かという観点からすると、法則 97「分離文節」と法則 98「接合文節」が「非融合アクセント」に相当し、法則 99「結合文節」が「融合アクセント」に相当すると思われる。

この 3 つの法則の間関係について、『新明解日本語アクセント辞典』の付録である「アクセント習得法則」には以下のような記述がある。

まず、「97 分離文節」の法則の「具体例」のところに以下の解説がある。「日常の会話などでは、文節

表 1 文節のアクセントの法則一覧(秋永一枝(2010)「アクセント習得法則」(106))³⁾

	分離文節 (97)	接合文節 (98)	結合文節 (99)
自 縄 自 縛	ジジョー・ジバク (ジジョー・ジバク)	ジジョージバク	ジジョージバク
自 由 自 在	ジュー・ジザイ (ジュー・ジザイ)	ジュージザイ	ジュージザイ
青 息 吐 息	アオイキ・トイキ (アオイキ・トイキ)	アオイキトイキ	アオイキトイキ
白 河 夜 船	シラカワ・ヨフネ (シラカワ・ヨフネ)	シラカワヨフネ	シラカワヨフネ
否 が 応 だ も 言 わ ぬ が 花	イヤガ・オーデモ イワヌガ・ハナ (イワヌガ・ハナ)	(イヤガオーデモ) イワヌガハナ	イヤガオーデモ イワヌガハナ
是 が 非 だ も	ゼガ・ビデモ (ゼガ・ビデモ)	ゼガビデモ	ゼガビデモ
飲 ま ず 食 わ ず	アマズ・クワズ (アマズ・クワズ)	アマズクワズ	ノマズクワズ
年 が ら 年 中	ネンガラ・ネンジュー (ネンガラ・ネンジュー)	ネンガラネンジュー	ネンガラネンジュー
件 の 如 し	(クダンノ・ゴトシ)	クダンノゴトシ	クダンノゴトシ

3) “・”については、『新明解日本語アクセント辞典』の解説では「連語などアクセントに切れめがある場合には、そこに・を置き、区切り」とされている。

が接合及び結合して変化をおこす場合が多い。」「『分離文節のみ』としたものは、前後の文節を離して発音するのがふつうであるが、それ以外は特に後部の文節を強調しようとしないうり、全体が一続きになってしまう。」「分離文節のみのものは、原則として前部・後部とも起伏式であることのほかに、前部と後部が対等の関係にあるもの、前後の文節が長くて、一続きに発音しにくいものなどがあげられよう。」さらに、(1)分離文節のみの例（「御無理御尤も」〔ゴムリ・ゴモットモ〕など）、(2)接合文節と両様あるもの（「油断大敵」〔ユダン・タイテキ〕 接合文節：〔ユダントタイテキ〕など）、(3)結合文節と両様あるもの（「願ったり叶ったり」〔ネガッター・カナッター〕 結合文節：〔ネガッターカナッター〕など）を列挙しており、(2) 接合文節と両様あるものがもっとも多いとしている。

一方、「98 接合文節」法則の「具体例」の解説のところに、「拍数の多いもの、また後部の文節が頭高型のものは接合しにくく、分離する傾向がある。」という内容がある。

以上を、分離文節と接合文節になりやすさという観点からまとめてみると、以下の3つのレベルがあることになる。

レベルⅠ：前部・後部とも起伏式であるという条件プラス、(i) 前部と後部が対等の関係にある、或は、(ii) 前後の文節が長くて、一続きに発音しにくい、というような場合は分離文節の形でしか出現しない。

レベルⅡ：(i) 拍数の多いもの、また(ii) 後部の文節が頭高型のもの、の場合は分離する傾向がある。

レベルⅢ：ⅠとⅡ以外の場合、分離文節と接合文節と両様がある。この形が最も多い。

つまり、多くの場合（レベルⅢ）は分離文節と接合文節は、同じ語にとって、本論文で言う「非融合アクセント」の2種類の実現の形、バリエーションとして存在しているのではないかと考えられる。

分離文節と接合文節は、いわゆる「複合語アクセント規則」（結合文節にあたる）にならないという点では共通している。

ここで、「分離文節」と「接合文節」はそれぞれ具体的にはどのようなものなのかを『新明解日本語アクセント辞典 CD付き』の編集者である秋永氏本人の発音(CD)を通して確認しておく。

同一の内容（語）に分離文節と接合文節の両方の発音が収録されているものについて、その実際の高さの動きを確認し、その曲線を下に掲げる（図1～図16）。図1～図16の縦線は複合語の後部要素の開始時点をあらわしている。

図1から図16、前部要素と後部要素のアクセント型の組み合わせと関係なく全般に言えるのは、接合文節の発音より分離文節の発音のほうが持続時間が長い場合が多く⁴、場合によっては前後の間にやや長めのポーズが観察される。また何よりも、分離文節と比べると接合文節のほうは、後部要素におけるアクセントの山が低く抑えられていることが目立つ。この点については、接合文節の発音は郡(2017)が「文内イントネーション」を論じる際の、前部が後部を意味的に限定する文節などに生じる「アクセントを弱める」に、分離文節の発音は「アクセントを弱めない」に相当すると考えられる。郡(2017)によると、「アクセントを弱める」というのは「アクセントの高さの動きが目立たないように発音すること」だと

4) これはポーズがあるためだと思われる。

いう。さらに、アクセントの弱めには、(a)アクセントの山を低く抑える場合（すぐ前の文節にアクセントの下げがあるとき）と、(b)始まりの高さをそのすぐ前にそろえる場合（すぐ前の文節にアクセントの下げがないとき）という2種類があるという。

以下、前部要素にアクセントの下げがないときと、あるときに分けて見ていく。

まず、前部要素にアクセントの下げがないとき、前部と後部が平板型+平板型（図1、図2）、平板型+尾高型（図3）の場合、分離文節の図（左）から、後部要素の初頭に（「自縄自縛」の「自縛（ジバク）」の[ジ]から[バ]、「油断大敵」の「大敵（タイテキ）」の[タイ]の内部、「両手に花」の「花（ハナ）」の[ハ]から[ナ]に明らかな上昇が見られる。一方、接合文節の図（右）では後部要素（縦線の右側）に明瞭な上昇が見られない。前部要素の末尾の高さを受けて、そこからやや下降するように見えるものもあるが、聴覚的印象としては後部要素は平らに続いているように聞こえる（図3の右の「両手に花だ」⁵は平板型+尾高型であるため、平らかな動きは[ハナ]の[ナ]まで続く）。

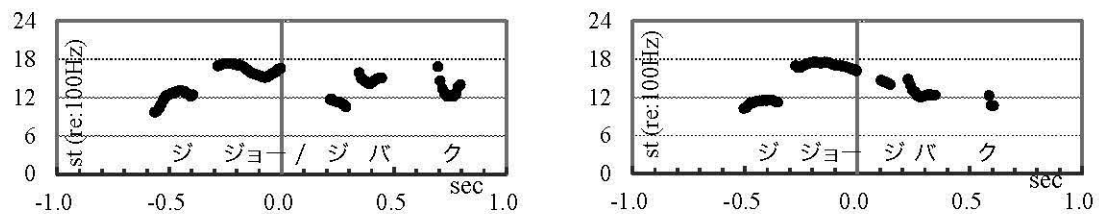


図1 「自縄自縛」 平板型+平板型（長音類冒頭ではない）

左：分離文節 ジ'ジョー・ジ'バク 右：接合文節 ジ'ジョー・ジバク

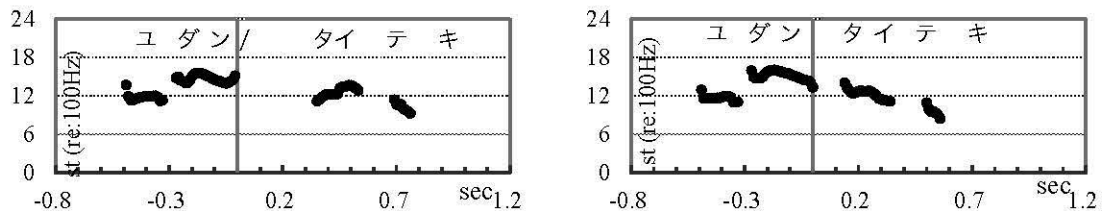


図2 「油断大敵」 平板型+平板型（長音類冒頭）

左：分離文節 ユ'ダン・タ'イテキ 右：接合文節 ユ'ダンタイテキ

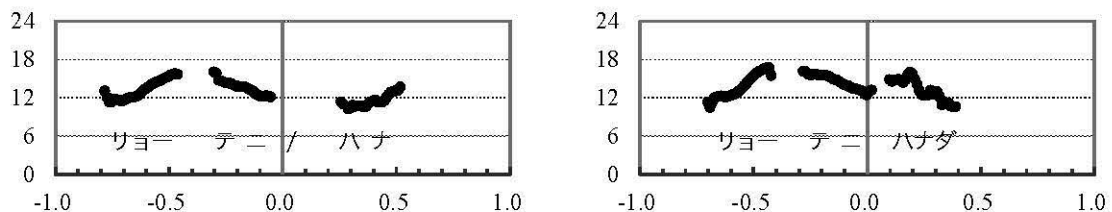


図3 両手に花 平板型+尾高型（長音類冒頭ではない）

左：分離文節 リョ'ーテニ・ハナ' 右：接合文節⁶ リョ'ーテニハナ'

5) 「両手に花」については、分離文節の音声は「両手に花」である一方、接合文節の音声は「両手に花だ」である。

6) 「両手に花」の接合文節のCD発音は「両手に花だ」[リョ'ーテニハナ'ダ]である。

次に、前部要素にアクセントの下げがあるときについて、まず、後部要素にアクセントの下げがない場合（図4～図8）を見てみる。接合文節の場合、核のない後部要素が、核がある前部要素の高さの下降の動きに続いて、更に下がっていくパターン（図4～図6）と、前部要素の末尾の高さを受けて、そこからほぼ平らな動きを保つパターン（図7、図8）がある。特に、図4の「自由自在」の接合文節の[ジュー・ジサイ]については、その後部要素だけを取り出して聞くと、ほぼ頭高型に、[ジ]の後に大きな下がりが感じられるような動きになっている。そして、図5の「白河夜船」の接合文節の[シラ・カワヨフネ]については、後部要素はほぼ中高型に、[フ]の後に大きな下降が筆者の耳には聞こえる。つまり、接合文節は、後部要素の元々のアクセントをある程度崩してしまう場合があるということになる。一方、分離文節の場合、後部要素の最初において上昇が見られ、そして、後部要素の高さの山は、接合文節のときのそれより高いが、後部要素のアクセントの山と前部要素の山の高さの差は語によって程度の差があり、図7の「花より団子」では高さの差は大きくない。

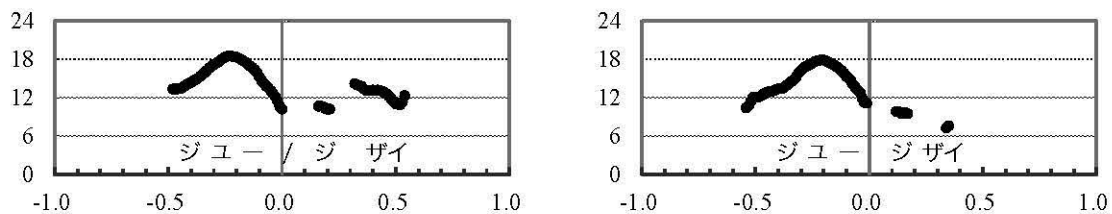


図4 自由自在 中高型+平板型（長音類冒頭ではない）

左：分離文節 ジュー・ジサイ 右：接合文節 ジュー・ジサイ

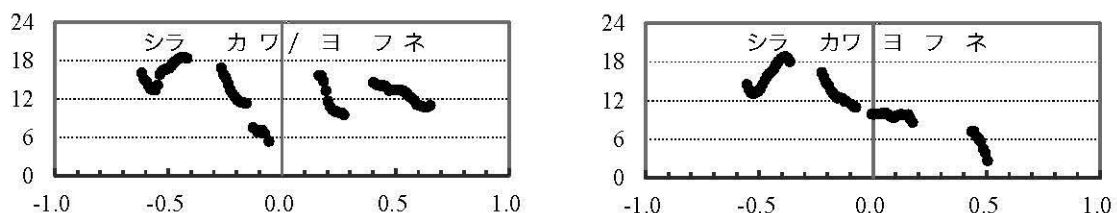


図5 白河夜船 中高型+平板型（長音類冒頭ではない）

左：分離文節 シラ・カワ・ヨフネ 右：接合文節 シラ・カワヨフネ

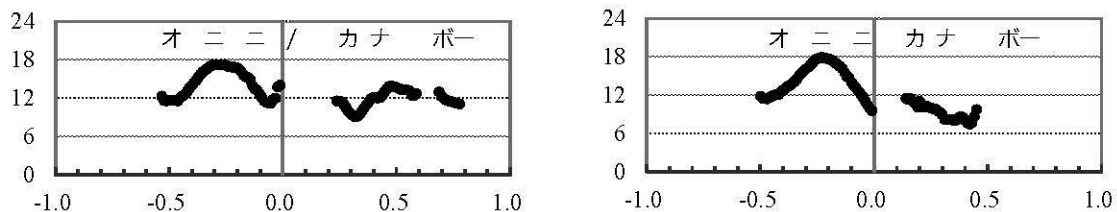


図6 鬼に金棒 中高型+平板型（長音類冒頭ではない）

左：分離文節 オニ・カナポー 右：接合文節 オニ・カナポー

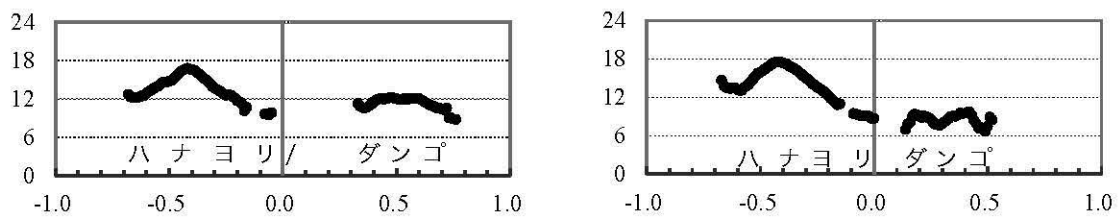


図7 花より団子 中高原型+平板型（長音類冒頭）

左：分離文節 ハナヨリ・ダンゴ⁷⁾ 右：接合文節 ハナヨリダンゴ

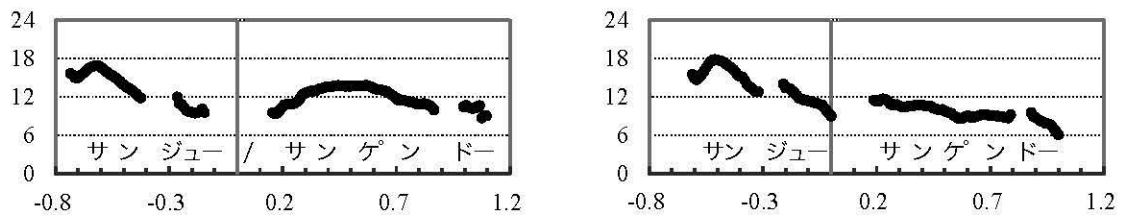


図8 三十三間堂 頭高原型+平板型（長音類冒頭）

左：分離文節 サンジュー・サンゲンドー 右：接合文節 サンジューサンゲンドー

最後に、前部要素にアクセントの下げがあり、後部要素にもアクセントの下げがある場合（図9～図16）を見てみる。

後部要素が頭高型のもの（中高原型+頭高型の図9、図10、頭高型+頭高型の図12～図15）については、分離文節の場合、後部要素の冒頭は、前部要素の末尾の高さからそのまま続くのではなく、一度高めて比較的高い高さからスタートし（特に、図10の「否が応でも」の前後の二つのアクセントの山はほぼ同じ高さ）、そこから下がるのである。一方、接合文節の場合、後部要素の冒頭は、前部要素の末尾の高さをほぼそのまま受けて、さらにそこから下がるのである。無論この場合における後部要素のアクセントの山は相当抑えられているということである。

図16の頭高型+中高原型については、頭高型+頭高型の図12～図15と比べ、後部要素の下がり目は1拍目の後ではないため（後部要素の長さも関係するが、後部要素が同じ長さのとき、後部が中高原型のもものは、後部要素の下がりの区間が、後部要素が頭高型のものそれより短い。この[マ'テド・ク'ラセ'ド]の場合は下がりの区間は比較的短い）、分離文節の場合、後部要素の冒頭はそこまで上げていないのである。接合文節との差もほかの場合ほど明確ではないようである。

7) “ゴ”はガ行鼻音をあらわす。

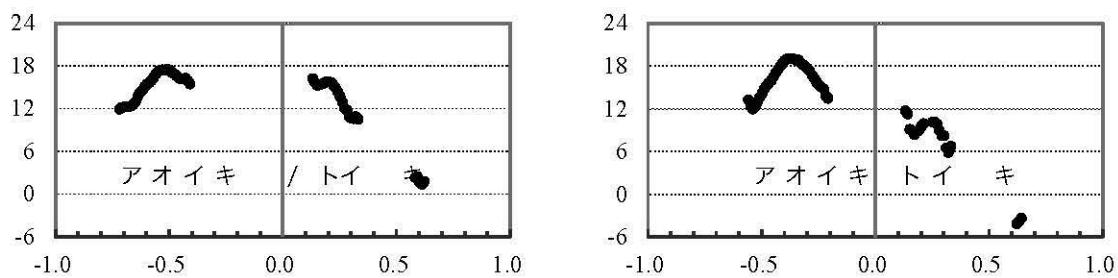


図9 青息吐息 中高型+頭高型

左：分離文節 ア[°]オイ^キ・[°]トイ^キ

右：接合文節 ア[°]オイ^キトイ^キ

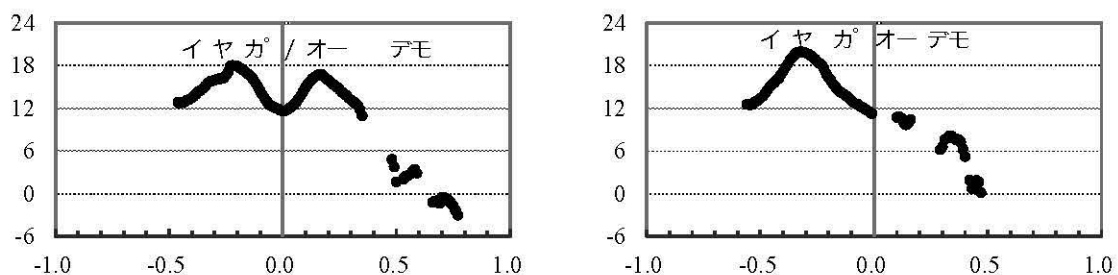


図10 否が応でも⁹ 中高型+頭高型

左：分離文節 イ[°]ヤ^カ・[°]オー^{デモ}

右：接合文節 イ[°]ヤ^カオー^{デモ}

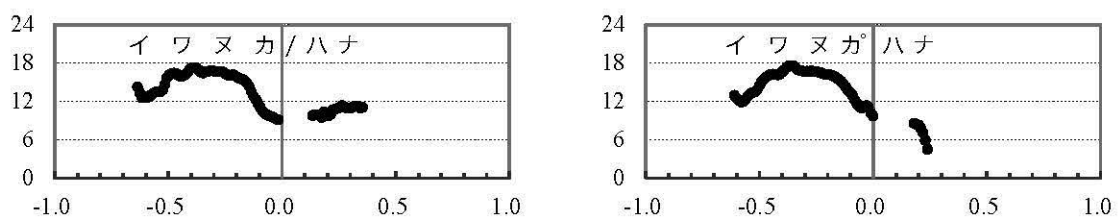


図11 言わぬが花 中高型+尾高型（長音類冒頭ではない）

左：分離文節 イ[°]ワヌ^カ・[°]ハナ[°]

右：接合文節 イ[°]ワヌ^カハナ[°]

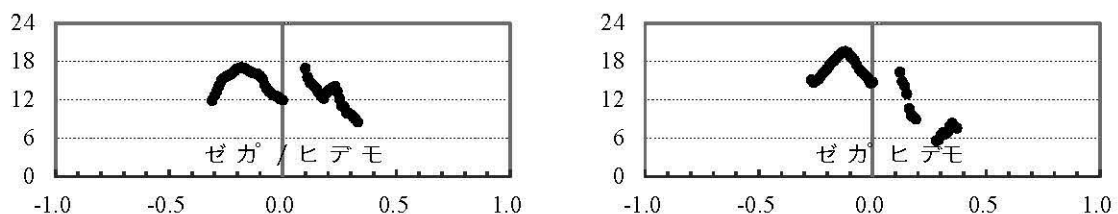


図12 是が非でも 頭高型+頭高型

左：分離文節 [°]ゼ^カ・[°]ヒ^{デモ}

右：接合文節 [°]ゼ^カヒ^{デモ}

8) “^キ”のような下線は母音無声化をあらわす。

9) 「否が応でも」の接合文節の発音に関しては、分離文節(97)・接合文節(98)・結合文節(99)の文節一覧の例としてあげられており、CDにもその発音が収録されているが、括弧がついている「(イ[°]ヤ^カオー^{デモ})」に示されているように、辞典本体の「否が応でも」の項目には接合文節の法則 98 が記載されていない。

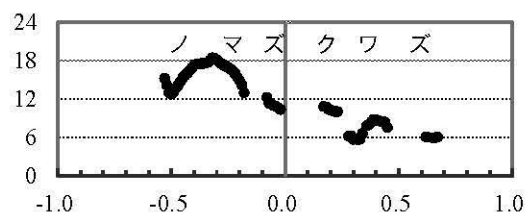
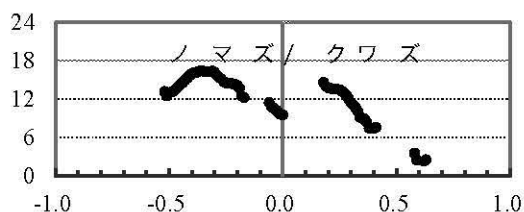


図 13 飲まず食わず 頭高型+頭高型

左：分離文節 「ノマズ・クワズ」

右：接合文節 「ノマズクワズ」

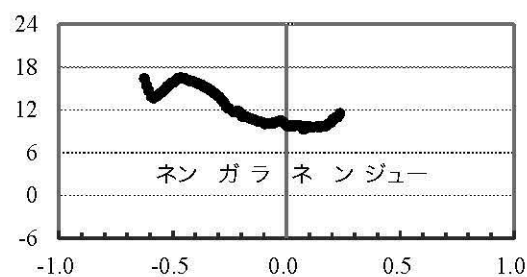
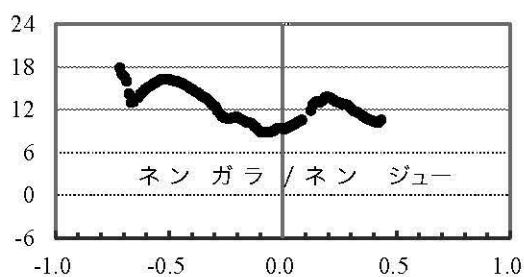


図 14 年がら年中 頭高型+頭高型

左：分離文節 「ネンガラ・ネンジュー」

右：接合文節 「ネンガラネンジュー」

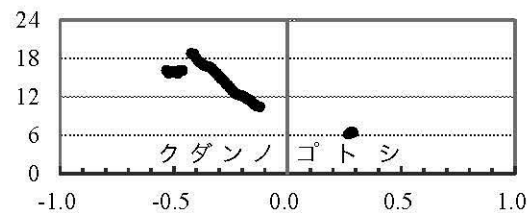
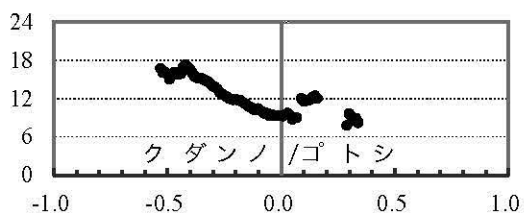


図 15 件のごとし¹⁰ 頭高型+頭高型

左：分離文節 「クダンノ・ゴトシ」

右：接合文節 「クダンノゴトシ」

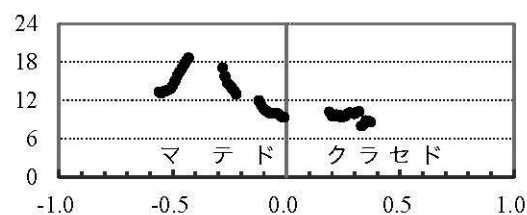
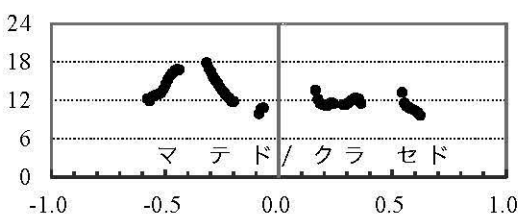


図 16 待てど暮らせど 頭高型+中高型（長音類冒頭ではない）

左：分離文節 「マテド・クラセド」

右：接合文節 「マテドクラセド」

10) 「件のごとし」の分離文節の発音に関しては、分離文節(97)・接合文節(98)・結合文節(99)の文節一覧の例としてあげており、CDにもその発音が収録されているが、括弧がついている「(クダンノ・ゴトシ)」に示されているように、辞典本体の「件のごとし」の項目には分離文節の法則 97 が記載されていない。

3 後部要素の「アクセントを弱める」発音と「弱めない」発音について

こうした「分離文節」と「接合文節」は実際、聴覚的自然度的に差があるのか。これまでの筆者による聴覚自然度調査（陳(2019)など）では、同一の文における調査語を「非融合アクセント」と「融合アクセント」の2種類の音声で収録して協力者に聞かせる、という方法を使用しているが、一口に「非融合アクセント」といっても、後部要素のアクセントを弱めるかについてバリエーションがあると考えられる。複数の聴覚自然度調査に用いられている「非融合アクセント」を音声提供協力者に収録の依頼をしたとき、「非融合アクセント」を具体的にどのように発音してほしいなどほとんど指示していない。非融合アクセントの発音について、後部要素のアクセントを弱めるか否かが聴覚的自然度に影響しているのかを聴取調査で調べた。

3.1 方法

そこで、『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（NHK2016）に非融合アクセントしか記載されていない語6つ（平板型+平板型のもの3つと、頭高型+平板型のもの3つ）を用意し、それぞれを4つの調査文に埋め込んで計24の調査文を作成した。次に、それぞれの文につき、調査語を①融合アクセント、②非融合アクセントで後部要素を弱めないバージョン（「分離分節」に近い）、③非融合アクセントで後部要素を弱めるバージョン（「接合分節」に近い）で発音した音声（計72種類）を用意した。音声提供者は首都圏で生まれ育った30歳代の東京方言話者1名（言語学分野の研究者）である。

6つの調査語と各語の「融合アクセント」「非融合アクセント（弱めない）」「非融合アクセント（弱める）」3種類の発音を表2に示す。また、実際の高さの動きの一部を図17と図18に示す。

そして、6語×文脈4種×発音3種（「融合アクセント」「非融合アクセント（弱めない）」「非融合アクセント（弱める）」）の計72音声を首都圏で生まれ育った18～24歳の日本語母語話者17名に1音声につき繰り返し2回聞かせ（テスト文も提示）、そのアクセントの自然度を4段階（1.非常に不自然 2.どちらかといえば不自然 3.どちらかといえば自然 4.非常に自然）で評価してもらった。

表2 調査語¹¹⁾と3種類の発音

		a 融合	b 非融合(弱める)	c 非融合(弱めない)
平板型 +	自信喪失	ジ・シンゾーシツ	ジ・シンソーシツ	ジ・シンゾーシツ
	原因不明	ゲ・ンインフ・メー	ゲ・ンインフメー	ゲ・ンインフ・メー
平板型	業績悪化	ギョー・セキアツカ	ギョー・セキアツカ	ギョー・セキアツカ
頭高型 +	制度導入	セードド・ニュー	セードド ¹²⁾ ・ニュー	セードド・ニュー
	利益追求	リエキツ・イキュー	リエキツ ¹²⁾ ・イキュー	リエキツ・イキュー
平板型	民族独立	ミンゾクド・クリツ	ミンゾクド ¹²⁾ ・クリツ	ミンゾクド・クリツ

11) 「原因不明」は『新明解日本語アクセント辞典』では[ゲンインフメー→98]と記載されている。それ以外の語は『新明解日本語アクセント辞典』には記載がない。

12) 郡(2016)に倣い、記号 p で発音としては後部要素の高さの動きが抑えられることをあらわす。

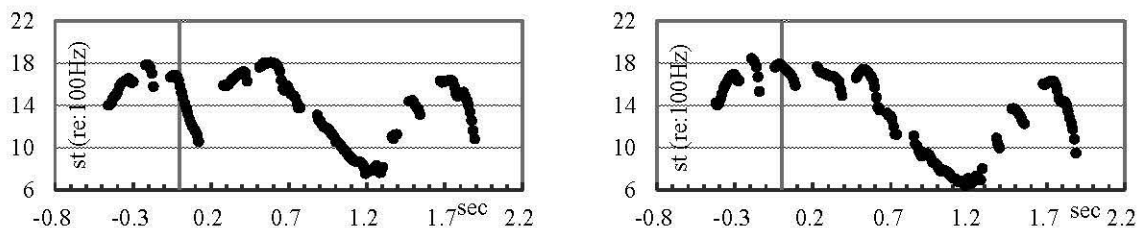


図 17 「業績悪化」(平板型+平板型) 文脈① 「業績悪化を定義するのは難しいですか?」

左: 非融合(弱めない) ギョ「一セキア」ツカ 右: 非融合(弱める) ギョ「一セキア」ツカ

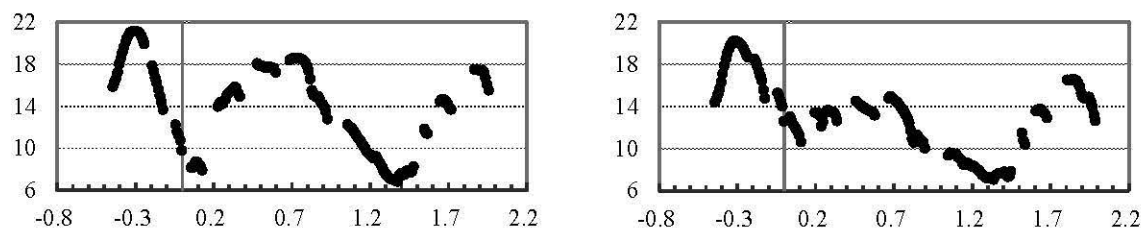


図 18 「民族独立」(頭高型+平板型) 文脈① 「民族独立を定義するのは難しいですか?」

左: 非融合(弱めない) 「ミンゾクド」クリツ 右: 非融合(弱める) 「ミンゾクド」p クリツ

表 3 「業績悪化」(平板型+平板型) の 12 種の音声

文脈種類	文	発音種類	発音
①	業績悪化を定義するのは難しいですか?	a 融合	ギョ「一セキア」ツカ
	同上	b 非融合(弱める)	ギョ「一セキア」ツカ
	同上	c 非融合(弱めない)	ギョ「一セキア」ツカ
②	業績悪化について教えてください	a 融合	ギョ「一セキア」ツカ
	同上	b 非融合(弱める)	ギョ「一セキア」ツカ
	同上	c 非融合(弱めない)	ギョ「一セキア」ツカ
③	現在も業績悪化が続いています	a 融合	ギョ「一セキア」ツカ
	同上	b 非融合(弱める)	ギョ「一セキア」ツカ
	同上	c 非融合(弱めない)	ギョ「一セキア」ツカ
④	なんとか業績悪化をくい止めました	a 融合	ギョ「一セキア」ツカ
	同上	b 非融合(弱める)	ギョ「一セキア」ツカ
	同上	c 非融合(弱めない)	ギョ「一セキア」ツカ

表 4 非融合(弱めない)と非融合(弱める)における「不自然」と「自然」の評価回数と割合(6語)

	「不自然」の評価回数と割合		「自然」の評価回数と割合	
非融合(弱めない)	42	10%	365	90%
非融合(弱める)	25	6%	382	94%

例えば、「業績悪化」(平板型+平板型)の場合は表3のように、1調査語につき、4つの文で計12種類の音声を聞かせている。

図17は「業績悪化」の文脈①「業績悪化を定義するのは難しいですか?」の非融合アクセント(弱めない) (左)と「非融合アクセント(弱める)」(右)の発音の高さの動きの曲線である。そして、図18は「民族独立」の文脈①「民族独立を定義するのは難しいですか?」の発音の高さの動きの曲線である。図17と図18の縦線は複合語の後部要素の開始時点をあらわしている。

3.2 結果と考察

まず、同一の協力者が同じ文の3種類の発音(「融合アクセント」「非融合アクセント(弱めない)」「非融合アクセント(弱める)」)全てを「不自然」か「どちらかといえば不自然」と評価した場合、当該協力者のこの3つの評価を排除し総評価回数としてカウントしていない。そして、得られた各文の発音に対する評価を分類し、「非常に不自然」と「どちらかといえば不自然」をまとめて「不自然」,「どちらかといえば自然」と「非常に自然」をまとめて「自然」とする。

非融合発音(弱めない)と非融合発音(弱める)の、それぞれの「不自然」「自然」の評価回数と割合を表4に示す。「非融合アクセント(弱めない)」と「非融合アクセント(弱める)」での「不自然」と「自然」の評価回数の分布の同一性を正確確率検定(両側)で検定したところ、有意差が認められた($p<0.05$)。すなわち、「非融合アクセント(弱めない)」と「非融合アクセント(弱める)」によって「不自然」と「自然」の評価割合が変わるということになる。

この結果から、文における「非融合アクセント」の発音について、「弱めない」発音より、「弱める」発音のほうが、聴覚的自然度が高いことが示唆された。

調査に使われた「非融合アクセント(弱めない)」と「非融合アクセント(弱める)」の音声(主に頭高型+平板型のものについて)はあくまで両者の比較という意味での後部要素を「弱めない」発音と「弱める」発音であるが、(単独ではなく)文に入れた場合、同一の内容については、「非融合アクセント(弱めない)」より「非融合アクセント(弱める)」のほうが若干自然であるという可能性が示唆された。

郡(2016)では、「正体不明」[‘ショ’ータイプpメー]や「中国南部」[‘チュ’ーゴクpナ’ンブ]などのようなアクセントが融合しないものの実際の発音に注目し、「発音としては後部要素の高さの動きが抑えられ(記号pはそのことを示す)、抑え方が大きいと「正体不明」が[‘ショ’ータイプメー]のような発音にもなる。」としている。また、なぜ後部要素の高さの動きが抑えられるのかについては、「後部要素のアクセントの音声的実現度を弱めて抑えることで全体としての『1語』感を持たせるためと考えられる」としている。

郡(2016)の考え方にもとづけば、同じ「非融合アクセント」で発音されている同一の複合語に見られる後部要素の高さの動きを弱めない発音より、弱める発音のほうが若干自然であるという傾向は、特に文の中で(複合語単独ではなく)、文の一部として機能している場合、後部要素のアクセントの音声的実現度を弱めるような発音のほうが、前部要素と後部要素を含む全体がより「1語」感を持つ、つまり、「ひとまとまり性」を持つようになるためだと思われる。

しかしながら、この調査に使われている「非融合アクセント(弱めない)」と「非融合アクセント(弱

める)」の音声、特に頭高型+平板型のものについては、あくまで両者を相対的に比較したものであり、後部要素のアクセントの山が後部要素の冒頭からどのくらい上がっているのか、前部要素のアクセントの山と後部要素のそれとの差はどのくらいあるのか、などについては考慮されていない。今後はこうした点を踏まえてさらに検討する必要がある。

4 まとめ

本稿では非融合アクセントの具体的な形について、「分離文節」と「接合文節」の比較を通して検討してきた。まず『新明解日本語アクセント辞典』のCD音声で、編集者である秋永氏のいう「分離文節」と「接合文節」の発音の特徴を確認した。分離文節と比べると接合文節のほうが、後部要素におけるアクセントの山が低く抑えられていることが目立つ点について、接合文節の発音は郡(2017)が「文内イントネーション」を論じる際の、文の1つ1つの文節に生じる「アクセントを弱める」に相当し、分離文節の発音は「アクセントを弱めない」に相当するという考え方を提示したうえで、複合語全体が1つの中高型アクセントになるか否かという観点から、「分離文節」と「接合文節」は「非融合アクセント」の2種類のバリエーションとして扱う立場をとった。

さらに、「分離文節」と「接合文節」は実際、聴覚的自然度に差があるのか、つまり、非融合アクセントの発音について、後部要素のアクセントを弱めるか否かが聴覚的自然度に影響しているのかを聴取調査で調べた。その結果、文における非融合アクセントの発音について、後部要素のアクセントを「弱めない」発音より、「弱める」発音のほうが、聴覚的自然度が高いことが示唆された。

引用文献

- 秋永一枝（編）（2010）『新明解日本語アクセント辞典 CD付き』三省堂。
- 郡史郎（2016）「アクセントの複合形態と長い複合語のアクセント—『携帯電話電源オフ車両』などの説明原理についての覚え書き—」『音声言語 VII』31-48, 近畿音声言語研究会。
- 郡史郎（2017）「じょうずな朗読とイントネーション」『音声言語の研究 11』25-36, 大阪大学大学院言語文化研究科。
- 陳曦（2019）「日本語の複合語におけるアクセントの融合・非融合に関する研究」大阪大学大学院言語文化研究科博士学位論文。
- NHK 放送文化研究所（編）（2016）『NHK 日本語発音アクセント新辞典』NHK 出版。

謝辞

調査にご協力いただいた皆様、様々な方を紹介していただいた方々に御礼申し上げます。本研究はJSPS 科研費 18J10628 の助成を受けたものです。